

地域環境学のすすめ

別府大学短期大学部教授 秋田 清

I. はじめに

地域社会研究センターは、読売新聞西部本社と共催で、公開講座「別府湾」を開催した。読売新聞社からの呼びかけに応じて、本講座を開催する際の確認はつぎのようなことであった。

すなわち、戦後の日本経済の発展によって、われわれの生活は、効率と快適さを獲得した反面、自然環境、都市環境の悪化など深刻な問題に直面してきた。それは個別の地域だけの問題ではなく、地球規模での問題であり、私たちの日々の暮らしや生き方そのものが問われている。この際、別府湾を、自然環境や都市環境問題のシンボルとして位置づけ、自然環境と共生できる生産・生活のスタイルを求めて、別府湾の過去と現在を学んで、私たちの暮らしのあり方を考えてみよう、ということであった。

またセンターは、宇佐市で「福祉と地域文化」をめぐるシンポジウムを、日田市で「酒と地域文化」をテーマにしたシンポジウムを、大分キャンパスでは地域と大学のあり方をめぐってのシンポジウムを行った。

こうした活動を通してわれわれが感じたことは、講座やシンポジウムに参加した人々が、自分自身の生き方をみつめ、自然や、自分とかかわりのある他の人々、地域との関係を作り直そうとしているということであった。普遍的なものに価値があり、個別的なもの、日常的なものは価値が低いものというような考えは意味をなさないようになってきている。こうしたことを考えた上での学問研究や教育、そして地域におけるネットワークづくりが要請されているということであった。

II. 新しい人間関係の模索

公開講座「別府湾」の特徴として野外講義を設けたが、これが予想以上に好評だったし、われわれ主催者も楽しむことができた。

第1回目の住吉浜の砂浜での講義。浜辺に流れ着いた珍しいものを拾って尋ねると、それが何であり、どこから流れ着いたかを、講師が解説するという形で進められたが、参加者は目を輝かせて浜辺を歩き回り、解説に耳を傾けていた。漂流物の中にあつた黒い四角な物がサメの卵だと教えられると、驚きの声が上がった。

第2回の「体験・古代人の別府湾」では旧石器時代の石器の発見についての話を聞きながら、古代の人々が駆けまわった丘を眺め、別府湾を見ていた古代人の眼に想いを馳せた。

第4回の「鹿鳴越湧水と八坂川巡り」では、八坂川流域一帯を見通せる山の上から、日出城址公園までのバスによる湧水めぐりを行った。現在でも生活の中で生きている湧水もあれば、新興住宅地になり、コンクリートで固められ近くに住む人も見向きもしない湧水もあった。人々の生活の変化と自然とのかかわりの変化を読取ることができて、興味深い小旅行であった。

しかし、私自身がそのことより興味深かったのは、マイクロバスに乗ってのことだったが、細い山道を走り回ることだった。たしかに、山の上まで舗装された道は近代化された産業や生活のために作り変えられた自然であったが、そこにはかつての人々の生活のかけがえが残っていたし、近代化された生活をも包み込んでいる自然の豊かさがあった。

そしてまた、この小旅行を楽しいものにしていただしたのは、おそらくこの講座の参加者に多かったお年寄りの夫婦たちの楽しげな様子であった。つまらない見栄や欲を捨てた老夫婦がお互いをいたわりながら、その時そのときを味わっている姿は、たとえば、大野川に残っている江戸時代の石で固められた船着場が作り出す雰囲気や、枯葉をすっかり落として立っている木立などと重なって、なにか確かなもの、豊かなものを感じさせていた。

こうした講座を重ねていると、時々ライフジャケットを着けて、水の動きに任せて、川を流れていくという幸野敏治氏(大野川ネットワーク)の気持ちがわかるような気がしてくる。おそらくそこには、風景の違いと共に、全く別の世界が広がっているのであろう。大野川流域のさまざまなグループが連帯していくために必要なこととして、彼が強調する、自己主張をはっきりとする、しかし違いをお互いに認め合う、という原則も川流れをする彼の行動と重ねて考えるとき、それは単に、ネットワークの原則にとどまらず、生活の中での他の人々や自然との関わり方であるように思えてくる。

日田市で行った「酒と地域文化」をテーマにしたシンポジウムは、酒宴の持つ社会的、歴史的意味についての講演の後、ウイスキーやビールのメーカー、日本酒の醸造元の協賛を得て、文字通りのシンポジウム(酒宴)であった。「社会的・歴史的意味」についての議論もさることながら、酒の種類と肴との相性についての話や「最近の酒は甘口が多くなっているが、醸造元は消費者におもねり過ぎではないか」などと言う注文など、酒そのものにこめられた参加者の想いが逆に、人々の生活の豊かさを語って興味深かった。

宇佐市での「福祉と地域文化」は、それぞれの地域で生き死んでいく時のその地域における物語を探ろうと企画したものであった。準備過程でのビハラの会の人々、お寺の住職、保健婦さんたちとの話し合いは実りの多いものであった。当日の参加者相互の意見交換は、必ずしも最初の意図どおりに進んだわけではないが、「福祉」という概念が「障害者福祉」に限定されていた日本におけるこれまでの考え方が変わりつつあり、健常者も含めての生活の豊かさを作り出す概念になっているという問題提起を受けて、「いつかは死んで行く存在として」日々の生活をどのように送っていくかという意識が、多くの発言の底に共通に流れていたのは、われわれの「意図」や予想を越えたものであった。

「いつかは死んでいく存在」であることを意識することから、「既に死んでいった人々」、

「自分が死んだ後も生きていく人々」、「さらに生まれてくる人々」が意識され、「地域」が時間軸の中でも意味を持ち、そのとき初めて、地域が地域として存在しうるのかもしれない。

Ⅲ. 地域・福祉・環境

上にふれたように、福祉概念が障害者福祉に限定されたものから、一人ひとりの生き方や社会のあり方の問題として意識されつつあるのと機を一にして、環境概念も変わりつつある。かつて、「環境問題」とは、特定の企業による産業廃棄物のたれ流しであり、企業に対する改善要求や行政的な規制処置が問題であった。しかしその後、洗剤や油などの家庭排水、また自動車の排気ガスが問題になると、化石エネルギーの枯渇問題と共にわれわれの生活それ自身が環境破壊の原因であることが意識されてくる。

さらに野生の動植物のさまざまな種の絶滅が問題になるに及んで、人間の自然とのかかわりや自然とのかかわりを規定する社会のあり方が問題になってきた。またそれが、折からの世界的規模での不況ともあいまって、人々にこれまでの生活のあり方総体を転換しようという気持ちを生み出したきた。

こうした中で、環境歴史学という新しい学問も生まれつつある。これは、人々の生活が作り出してきた歴史が、それぞれの地域の自然環境に規定され、また逆に人々の活動が自然環境をつくりかえ、そうした中で作り出されてきた風景が、人々の精神活動に大きな影響を与えていることに着目して、人間の社会生活や歴史をそれぞれの地域の自然とのかかわりの中で明らかにしようとするものである。

同様に、社会学の分野では、環境社会学というものが生まれつつある。飯島伸子によると、環境社会学でいう環境とは「従来の社会学研究では関心を持たれることの少なかった物理的・化学的・自然的環境なのであるが、研究を社会的に展開していくにあたっては、その社会的・文化的環境との関係が重要かつ主要な位置を占めているのである」¹⁾。ここで飯島は「環境」を、つぎのような「環境問題」の「定義」に示されているように執拗に自然環境に限定することを強調している。すなわち、「物理的環境や化学的環境、あるいは自然的環境の変化や悪化と関連して、人間生活、人間集団、人間社会、社会関係などに発生するさまざまな影響や問題」²⁾。既に存在している社会学の諸分野を前提にして「環境問題」の社会学における位置を定めるとすれば、このような定義になるのは自然なことなのである。

しかし、社会総体を体系的に捉えようとする、近代社会が生み出した学問のあり方とは違う世界把握の仕方もあるのではないか。個人のライフサイクルやその中でのライフスタイルに視点をおいた世界把握の方法もあるような気がする。そうした視点から見ると、その人の生活を囲むものすべてが環境になる。環境を、ことさら自然環境に限定する必然

1) 飯島伸子「環境社会学」有斐閣ブックス、1993年、3頁。

2) 同『環境社会学』4頁。

性はない。マルクスの発言などを持ち出すまでもなく、自然はすでに人間化されている。むしろ自然と社会を直截に区別する思考こそが、近代社会が生み出した自然支配と自然破壊の元凶ではないのか。

たしかに、このような環境概念の拡大には、福祉概念の変化に関する議論に含まれているような危険性、すなわち、障害者福祉も、健常者のアメニティも、地域社会の健康なあり方もすべて「福祉」という言葉に含ませてしまうと、すべてのものが渾然となって、何も表現できなくなってしまうという危険性はある。また、環境歴史学を、社会の歴史的展開を自然環境との相互媒介的展開として捉えるものと言ってしまうと単なる常識になってしまう。

だが、われわれは、環境歴史学や環境社会学がなぜこの時期に生まれてきたのか、また福祉概念が変化し、それが環境問題と結び付けて議論されるようになりつつあるのはなぜかを問題にし、そのことの歴史的意味を探る必要があるのではないか。近代社会や近代の学問が作り出した、「真理は客観的、普遍的なものであり、普遍的なものにこそ価値がある」という信念は所詮歴史的なものではないのか。相対的なもの、個別的なもの、感性的なものに意味を見出し、そこから離れずに行う世界把握もあるのではないか。井戸をとびだした蛙が、必ずしも幸せだったわけではないだろうし、「普遍的な真理」は、貨幣の自己増殖欲、世界支配欲に目がくらんだ近代の幻だったのかもしれないのである。

IV. 地域環境学のすすめ

人々は、いま、国や地域、文化の相違、身体的、精神的障害のあるなしにかかわらず、自然や他の人々との新しい共生の方途を探ろうとしている。地域における、お祭りの復活や、新しい祭りの創造、「村づくり」、「まちづくり」、という言葉の氾濫はその端的な表れである。

戦後の経済の高度成長が、自らを律する規範を持った個人を作りきれないまま、伝統的な地域社会における人間関係、社会関係は急速に消え去りつつあり、それと共に人々の精神生活は大きく変化している。

物質的な欲求や見栄が人々の生活の中心的関心事であった時代は、物質的な豊かさの実現とともに終わりつつある。闇雲に借金をしたり、貯蓄をしたりしてさまざまのものを買いあさってきたが、気付いてみたら本当にほしいもの、必要なものはなくなっていた。見栄を張るのもばかばかしくなってきた。しかし、物欲と見栄を除いたら、生活の張りになるものは何もなかった、ということに多くの人が気付いたということかもしれない。

障害者や老人福祉に対する関心の高さは、政府や自治体の啓蒙活動や児童生徒に対する教育の成果でもあるが、生活の張り、生活の価値についての新しい物語づくりによるものでもある。福祉や環境が物質的、金銭的価値にとってかわりつつあるのである。

自然の無限性を前提に、物質的豊かさの追求、貨幣的富の蓄積、競争心と見栄の張り合

いに人々が奔走してきた社会は、経済的効率性に合致しないものを排除し、外的自然を支配の対象とみなし、破壊してきた。そうすることによって、自らの心を癒してくれるものを失ってきた。

ハンディキャップを持った人々は「障害者」としてしか存在できなかった。たとえば、脚のない人は、そのことが本人の歩こうとする意思にとって障害になるということよりも、社会の効率性にとって差し障りがあり害になるという響きを持っていたのではないか。

しかしいま、近代社会の中で支配され破壊されてきた自然や、排除されて来た障害者の生き様に触れ合うことが、「健常者(?)」の生き方に新しい方向を与えつつあるのである。

外的自然のあり方が、人間の自然(本性)でもあり、外的自然が人間に価値や行動の基準を提供するとは一概には言えないかもしれない。また、最近はやりの生命中心主義は、論理的には人間の自己解体に行き着かざるを得ないであろう。生命中心主義者は、病原菌もガン細胞も生命を持ったものだということを忘れている。われわれが食料として他の生物を食べる以外に存続できない以上、人間ではなく生命を中心においた思考と行動などはマヤカシである。細胞や遺伝子は、自らを他と区別し、自己を中心に世界を組織することによってはじめて存在しているのであり、個体として存在している人間もまた、このことから自由ではありえない。

その限りマルクス(Karl Marx)が語る「真の人間主義としての自然主義、真の自然主義としての人間主義」や「類と個の調和」などは、人間が肉体を持った存在である限り永遠に実現不可能な理想であろう。

だが、そうであるにもかかわらず、あるいはそうであるがゆえに、われわれは自然の風景の美しさに感動し、他の動物とのふれあいに心を癒され、傷つき、苦しい目にあったがゆえに優しさを求め、自らも持とうとするハンディキャップを持った人々とのふれあいに感動する。

所詮利己的な存在でしかない人間が存続し続けるためには、一方ではこうした感動³⁾を抛り所としながら、また他方では、自然や他の人々からの報復を受け、そのことを通じて身のほどを知らなければならないのかもしれない。所詮利己的でしかありえない人間が、利己的に振舞おうとしたときに、己がどんなに弱い存在でしかないかを思い知るのであり、そうして傷つくことを通して分を知り、自然や動植物や他の人々と折り合いをつけつつ生きていく以外にないのであり、そうした己を知ることを通して、自然や動植物や他の人々、つまり、環境あるいは地域の中で優しく生きることができるのかもしれない。

個人の生活を中心に、それを取り巻く外的自然、生産や流通、社会福祉や学校などの教育制度、自治体行政や諸地域組織のあり方を、地域環境として捉え、その改善の方途と個人の生活の在り様を探るものとして、地域環境学というものがあるのも良いのではなからうか。それは、単に抽象的な学としてではなく、諸個人間の交流とネットワークづくりと

³⁾ 中村雄二郎は、これを「共振」と呼んでいる。山口昌男他 5 名著『ひとはなぜ自然を求めるのか』三田出版会、1995 年。

して存在しうるのではなからうか